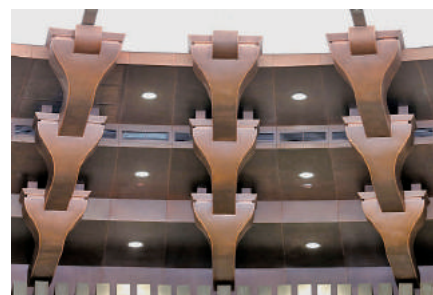
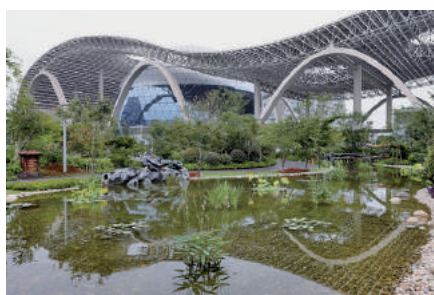


静岡県日中友好協議会

No. 122

2021. 3

NEWS LETTER



視窓

江南の風格と優美 / 杭州国際博覧中心

2016年に開催された「G20杭州サミット」のメイン会場として知られる「杭州国際博覧中心」は、前年の2015年、杭州市の市街から銭塘江の対岸に建設されました。このセンターは、地上5階と地下2階建て、延べ床面積850,000㎡、会議面積18,000㎡に、会議室61室、展示面積90,000㎡、国際標準展示ブース4500小間、駐車場4,000台を配し、会議室、展示会会場、宿泊施設（ホテル）、商業施設、オフィス施設の多目的複合施設となっています。

「G20杭州サミット」のメイン議事場は、中央に直径30m以上の巨大円形テーブルが配置され、壁には施された花窓（透かし窓）や木彫りの装飾、星空のように見えるドーム状の天井、独特な形状の斗組等は荘厳さを醸し出しています。また、センターの屋上には「西湖明珠に天から龍がおり、鳳凰が舞う」ことをイメージして作られた、伝統的な江南地方独特の屋上庭園が見られます。

特集

交流をつなぐ、オンラインビデオ会議で継続

コロナ禍の影響により、日中往来が制限されている中、政府は、昨年12月、ビジネスの短期往来、駐在員、留学生の長期滞在者を対象に、往来の再開が緩和しましたが、今年1月、緊急事態宣言の発令により、現時点、再び入国を制限しています。

こうした事情により、人的な日中往来の影響を受けていますが、静岡県と浙江省の交流において、両県省はオンライン方式に切り替えて事業の実施、或いは交流継続に向けて、情報交換、意見交換を行っています。今後、交流の内容によっては、今までなかったオンライン+オフラインのマルチスタイルの交流になっていく可能性があります。

静岡県・浙江省建設業交流養成講座



12月4日（金）、静岡と浙江をオンラインで結んで、日本の建設・建築分野の施工管理の管理手法等を浙江省企業に紹介することにより、浙江省の関連企業の管理水準向上の機会とする、オンラインビデオによる『静岡県・浙江省建設業交流養成講座』が開催されました。当日は、建設関連の行政・団体・企業約100名が集まり、日本技術士会中部本部静岡県支部の技術士に、「日本の建設施工現場での安全管理」と「日本のプレハブ式建築の施工技術・基準」で講義していただき、その後、質疑応答による交流が行われました。

現在、中国では、従来工法からP C工法への転換、安全軽視から重視への転換がはかられていて、時宜を得たテーマとして、熱心に聴取していました。

静岡県・浙江省環境交流会議

12月16日（水）、静岡と浙江をオンラインで結んで、静岡県・浙江省環境交流会議が開催され、静岡県環境資源協会と浙江省環保産業協会が近況報告と取組状況などを紹介し、次年度の事業計画を確認しました。

双方は相互訪問の中止代替として、環境関連企業に対してアンケート調査を行って相互にフィードバックし、環境ビジネス促進の進め方を相談しました。また、浙江省が始めたゴミ分類の状況や、低炭素・脱炭素、緑化技術（屋上、壁面）、省エネ・新エネ技術、リサイクル技術、循環技術、水素技術、気候変動等について、情報共有をはかりました。

SIBA県国際貿易振興会、浙江貿促会がトップ面談



互協力をしていくことを確認しました。

一昨年、「友好協力覚書」に署名したSIBA静岡県国際経済振興会と浙江省貿易促進委員会は、11月24日（火）、吉林会長と陳会長との間で、オンラインビデオ会議によるトップ面談を行いました。

双方会長は、オンラインであるが、一年ぶりに、互いに元気な姿で再開できることを喜ぶと共に、「近況報告」や「今後の交流」についての意見交換を行い、相互理解を深め、引き続き相

農業交流促進委員会総会

静岡県と浙江省農業農村庁で組織する農業交流促進委員会は、2年に1度、翌2年間の交流内容を協議するための会議を開催していますが、今年度は11月27日（金）、静岡と浙江をオンラインで結んで、総会と学術交流会が行われました。

総会において、来年度、往来制限が緩和され、相互渡航が可能になった後、農業調査員の相互派遣、相互受入の再開を確認し、次回は2022年に浙江省で開催することを確認しました。また、双方共に関心が高い「スマート農業」について、取組状況を紹介して、相互理解を深めました。

日中青年交流・オンラインビデオ会議



1月28日（木）、静岡県教育委員会は、日中青年交流事業を行っている、浙江省側の窓口・浙江省青年連合会と、オンライン会議を開催し、本年度中止した青年代表交流事業について、交流継続に向けて、今後の交流の在り方について意見を交わしました。

本県側から、木苗教育長、栗原日中青年代表交流実行委員会会長ら関係者が、浙江省側からは、顧国煜副主席、陳江風浙江省人民政府外事弁公室副主任ら関係者が出席し、木苗教育長は挨拶の中で「両県省は強い絆で結ばれている。コロナ禍が終息した暁には、これまで以上の交流ができる」と念願しました。

“満載爾帰、歲月流転”の研修生の今

静岡県では、国際交流の貢献、人材の養成を目的に、1981年から、毎年、中国から友好関係を締結している浙江省を中心に技術研修生を受入れ、これまで累計276人が来静しています。技術研修生は、学んだ成果を持ち帰り、母国の発展に寄与され、本県との友好の懸け橋として、本県に対する友情を維持続けていただいています。30年前、20年前、最近の研修生3人にスポットを当てて、オンラインでつなぎ、当時の事、現在の様子を聞きました。



〔1989年度〕高 継勝（当時：37才、所属：蕭山県二輕工業局副局長、テーマ：企業管理、研修先：友成機工(株)。現在：68才、所属：萊茵達控股集團董事長、英国・サウサンプトンフットボールクラブオーナー等）

研修は、自分の人生の道において、職業生涯に対しても、思想観念に対しても、未来の見解、理論・実践の向上に対しても、いずれもキープポイントとなる作用となり、重要な出来事であり、重要なターニングポイントになりました。

最も印象が深かったのは、日本のスーパーであり、日本の新幹線であり、日本の高速道路です。30年後の今日では、中国にはスーパーも、高速鉄道も、高速道路もあります。また、多くの日本友人、大学の教授、医師、労働者、経営者など各界各層の友人と知り合い、紀律遵守、勤勉節約、一生懸命、刻苦奮闘といった精神を直に学んだことです。



〔1998年度〕金 国慶（当時：31才、所属：静岡県・浙江省経済交流促進機構浙江省委員会事務局、テーマ：日本経済と対外投資、研修先：静岡県日中友好協議会。現在：53才、所属：静岡県・浙江省経済交流促進機構浙江省委員会事務局長）

日本語の私のレベルが低く、研修を通じて私の日本語レベルを向上させることができるかどうか、日本の皆さんと交流をすることができるかどうか、研修成果をあげられるかどうか、当時行く前を心配していました。

事業の精神、事業に対して真面目に取り組む精神であり、きめ細かなことをして仕事を進めていく、事業を進めていくということについて、深い印象を持っています。

日本語、日本の経済についても勉強したので、産業交流・経済交流に役立っています。日本に対する理解、日本人が何を求めているか、日本人の仕事のやり方・考え方も踏まえて、交流を促進するという点で、研修経験を活かすことができている。



〔2017年度〕王 倩（当時：31才、所属：桐廬県培智学校小・中等部教師、テーマ：日本の特殊教育、静岡県総合教育センター。現在、34才、桐廬県培智学校高等部教師）

日本での生活を通じて、日本語を聞いたり話したりすることをする機会が増え、交流ができるようになりましたが残念ながら、中国に戻ってから、また使う機会がなくなってしまったので、また日本語を忘れてしまいました。日本での研修生活を通じて、色々なものが新鮮で、また皆さん、仕事に敬意をもって、尊重して取り組むという点において、印象が残っています。

今も特殊教育、高校生を対象にした特殊教育の第一線にいますが、日本のきめ細かな教育、教務に取り組む姿勢、教育の制度化、データ化であり、どういう風な成長をしているか、どの辺がまだ足りないのか、どういうことをもっと教育すべきかを記録にとって、それを前と後ろを比較しながら、次の段階にどういう教育をしていくかを考えて実践していくかなどが役立っています。

トレンドナウ（潮流奔騰）

急成長するモバイルニュースアプリ

中国では、ニュースの発信側は大きく分けて4つ、新聞やテレビのような伝統メディア、自治体などの政府機関、ポータルサイト、ブロガーなどによるKOL（Key opinion leader）です。KOLはいわゆるユーザー自身が作るコンテンツ（自媒体）でしたが、ここに編集プロなどのコンテンツ制作のプロが入り、今、ニュースアプリがトレンドになっています。

「今日頭条」



「今日頭条（Toutiao）」は、ニュースのサービスメッセージです。2016年時点でアクティブユーザー1億5000万人。「頭条号」といわれる認証アカウントがポイントで、編集者もおらず、徹底したパーソナライズと動画を中心としたコンテンツの豊富さで膨大なユーザーの興味・関心に対応できるよう情報発信しています。

「財新」



「財信（Caixin）」は、2009年設立の中国の独立系経済メディアです。週刊誌やオンライン媒体を展開し、報道統制が厳しい中国で、世界を震撼させるスクープを連発。日本の「東洋経済オンライン」サイトで、一部記事を日本語で閲覧することができます。

「百度新聞」



「百度新聞」は、中国検索サイトの大手の百度（バイドゥ）に、独自のニュースを発信。今まで他社の記事の転載でしかやっていなかったが、これにより政治、経済、外交、社会事件などさまざまな分野のニュースを、独自に掲載しています。

「新浪新聞」



「新浪新聞」は、ポータルサイト「新浪」やミニブログサイト「新浪微博」のニュース系サイトであり、「新浪」は2009年12月に中国のLCD広告会社フォーカスメディア社のLCD事業などを買収し、中国最大手メディア運営会社であると同時に、中国最大の広告会社です。

「人民日報」



中国最大新聞の「人民日報」のニュースサイト版は、最近リニューアルされ、政務指数ランキングを発表し、伝統的なメディアと新興メディアの融合を加速し、権威あるニュース情報の発信手段と、全国的なモバイル政務サービスプラットフォームの構築をはかっています。

生け花・盆栽が普段の生活に

寧波大学外国語学院外籍教師
静岡県立大学グローバル地域センター客員講師
(静岡県日中友好協議会 交流推進員)

横井 香織



中国人の知人の家を訪ねると、どのお宅にもサンルームのように太陽光が入るスペースがあり、そこにはいくつもの花や観葉植物が置かれています。最近は、鉢植えに飽き足らず、日本の伝統文化である生け花や盆栽などに関心が集まる傾向にあります。ポスト・コロナの時代には、中国から伝わり日本の文化となった生け花や盆栽などを通じて、文化交流がますます深化するのではないかと思います。生け花や盆栽を日常に取り入れている二人の方を紹介したいと思います。



生け花は、中国から仏教とともに供花が伝来し、それが日本の風土の中で育成され芸術に高められました。ここ数年、中国の都市部では日本のフラワーアレンジメントや生け花を学ぶ人が急増しています。寧波大学の同僚である牛伶俐先生も、その一人です。牛先生は数年前、寧波で開かれた「人文花道」の体験教室に参加しました。このときすぐに生け花に魅了され、学び始めました。2019年には日本の大学に籍を置き、一年間、池坊流華道を学びました。寧波の教室で生け花を学ぶ人は、若い女性が圧倒的に多く、大学生や小中高生もいるというから驚

きます。その中には、自分の手で花を選び花の姿を整え、できあがった生け花をプレゼントとして母の日や誕生日などに贈る、という人もいます。中国人にとって生け花は、日本人が感じるよりずっと身近な芸術になっているといえるでしょう。

盆栽は、中国では「盆景」といい、唐代に始まりました。これが日本に伝わったのは平安時代の終わりごろで、その後禅宗の影響や日本人独特の感性により、独自の盆栽が発展してきました。最近の中国では、富裕層を中心に日本の盆栽を持つ愛好家が増えています。盆栽というと高齢者の趣味というイメージがありますが、若い愛好家も少なくなく、中国人バイヤーや富裕層が直接日本を訪れて盆栽を購入しています。中国で日本の盆栽が人気なのは、緻密で繊細な日本人の美的感覚に共感しているからなのかもしれません。

ところで、静岡市に苔聖園という盆栽園があるのをご存じでしょうか。この盆栽作家・漆畑大雅さんは、10代で単身中国に渡り中国語や中国文化を学びました。帰国後は著名な盆栽作家木村正彦氏に師事し、本格的に盆栽を始めました。現在は盆栽作家として活躍しており、国内外の展覧会に出品しています。また、流暢な中国語と英語で盆栽の魅力を海外に向けて発信しています。海外から盆栽の手入れや実演のオフーがあるようで、コロナ後は寧波や杭州で見かけるかもしれません。



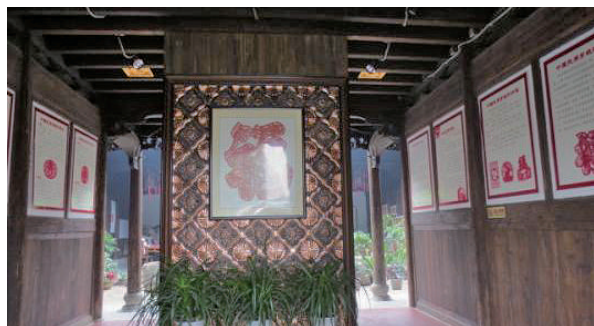
第四回中国風盆景展

“中国博物館紀行”

金華市剪紙博物館

所在地：金華市婺城区東市街50号

剪紙（切り絵）を伝承する工芸美術大師・詹東明氏が私財を投じて作った、2011年11月に開館した「金華市剪紙博物館」は浙江省金華市にあり、無料で開放されています。博物館は清時代の建物を利用し、レンガと木から成る構造、白い壁の黛瓦で、古式蒼然たる雰囲気を持つ、趣のある静かな佇まいを保っています。中国には、剪紙をテーマにした博物館は、ほかには華夏剪紙博物館（長沙）、中国剪紙博物館（揚州）があります。



南北朝時代（420－581）が起源とされる剪紙は悠久な歴史があり、中国各地で広く伝承されています。地方により、作風や題材、作り方、使われ方が異なり、一般的には、花や動物、日常風景や生活習慣、物語などで、吉祥などの意味を含蓄した図案を赤い紙にハサミで切ったものです。

2009年には、中国の剪紙はユネスコの世界無形文化遺産リストに登録されています。浙江省でも、南東に位置する台州地域、金華地域、温州地域はこの民間芸術の制作が盛んな地域です。

剪紙の歴史、流派を紹介し、館蔵品・清時代末期の民間剪紙作品90幅、国の無形文化遺産（浦江剪紙）の代表的継承者・呉善増氏の作品、“金華第一剪”と称せられている王風氏などから寄贈、詹東明氏自身の剪紙作品、全部で2000幅を展示しています。

作家が見た中国へタイムトリップ

浅田次郎、中国の旅

第117回直木賞受賞（1997年上期）『鉄道員』の浅田次郎（1951年～）は、多感な青年期に漢詩に感銘を受け、次第に漢文に親しむようになり、中学時代に、東洋史の泰斗・宮崎市定教授（1901年～1995年）の著作『宮崎市定全集』に巡りあい、後の著作活動に少なからぬ影響を受けています。

＊宮崎市定教授；中国の科挙制度と官僚制度に関する論考が著名

浅田次郎は、中学2年の時、国語の先生が漢詩を読み下し文で読んだ時に「なんだ、この美しい言葉は！」と感じ、「外国語なのに、言語に返り点をつけて日本の構文に直して読み下したら、非常に美しい文章になり、その上、言わんとしている内容まできちんと伝わってくる。そうした言葉の変換の不思議さにどんどん惹かれていった」と語っています。

浅田次郎は、清朝末期を描写した小説「蒼穹の昴」、「珍妃の井戸」、「中原の虹」、「マンチュアン・レポート」、「天子蒙塵」を書いています。「蒼穹の昴」は、架空人物・金持ちの放蕩息子・梁文秀（科挙試験に状元合格、光緒帝に仕える）と貧乏な家の息子・李春雲（宦官、御前太監、西太后に仕える）がそれぞれの立身出世の物語です。実在の光緒帝、西太后をはじめとする人物とともに物語が進んでいき、科挙のシーンでは、史料を読み込み、まるで実際に体験したかのように、科挙試験の様子を活写しています。

「蒼穹の昴 <科挙登第>」より――

「友達と呼ぶには畏れ多いがね。こちらは去年の直隸郷試の経魁、王逸君ですよ」

へえ、と老生は王逸の鮮やかな藍衣を眺めた。経魁とは郷試及第者のうち上位五名に与えられる尊称である。

「直隸省の経魁！それはすごい。合格確実じゃわ」王逸は応挙七十年の老生を見くだすように、鼻で笑った。

「何も珍しいことじゃあるまい。ここにはどこそこの経魁だけで何百人もいるんだ」

「ごもっともじゃ。かくいうわしも、何を隠そうもとは杭州府の経魁じゃて」

老人は笑いながら咳きこんだ。文秀と王逸は顔を見合わせた。

浙江省杭州府といえはかつての南宋の都、古くから多くの大吏高官を輩出する学芸の地である。同じ経魁といっても杭州のそれは当然水準が違う。

清の光緒年間（1875年～1908年）、南京の江南貢院と北京の順天貢院は中国で最大の中国の官吏登用試験「科挙」試験場であり、北京の順天貢院は既になく、南京の江南貢院は中国科挙博物館になっています。杭州の「科挙、郷試」試験場・杭州貢院は、その跡地に杭州高級中学（重点学校）があります。（科挙制度は隋の時代に始まり、約1300年にわたり歴代王朝で続けられた官吏登用制度、1904年7月4日に行われた殿試が最後の科挙試験となりました。）

史料によると、明清時代、科挙試験の「挙人」、「進士」、「状元」合格者は江蘇省、浙江省の出身者がほぼ半々に占められていました。今も、綿々と優秀な人材を輩出しています。



南京の江南貢院（当時）

発行所：静岡県日中友好協議会
発行人：栗原 績

静岡市葵区追手町44-1（静岡県産業経済会館1F）
TEL (054) 255-8111